
・オブ・ザ・デッド アイム・ライヴ

トカゲ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

・オブ・ザ・デッド アイム・ライヴ

【Nコード】

N2586D

【作者名】

トカゲ

【あらすじ】

生ける死者と化するまでのタイムリミットは、たったの二十四時間。死者の溢れる街角で、未来を閉ざされた男と光を失った男の疾走が始まる。さよならだけがなんちゃらだ。

・オブ・ザ・デッド アイム・ライヴ

ラジカセ（前書き）

注（ゾンビが出ます）。

注（過度な描写は控えてあります。空はのっぺりと広がっています。）

ラジカセ

「この声は黒人だな」タカハシは、ラジオから流れるクリスマスソングを聞きながら、目を瞑っている。「少し太っていて、目が見えない。少年の頃から苦難にぶち当たってきて、それを全て乗り越えてきたものの声だよ」

「歌声だけで、よくそこまで判るな」俺は自慢気に話すタカハシに、若干辟易しながらも答えた。「お前は立派だよ」

「俺は目が見えないから、その分、耳がいいんだ。声を聞けば、大体判る」

「だからって、歌手の生い立ちまで勝手に決め付けるなよ。百歩譲って、この歌手が黒人で、太っている、という所まではヨシとして、なんで、目が見えないだとか、苦難だとか、判るんだよ。判る筈ねえだろ」

「でも、俺には判るんだ」

「そんなタカハシ君に質問だ。俺はどうだ？ 俺は、どんな奴だ？

どんな半生を背負って、ここで生きている？」

「君は男で、きつと一人っ子だ。日本人として、平均的な苦難にぶちあたって、やはり日本人らしくそれを適当に乗り越えて、生きてきた。年齢は、二十歳には至っていない。で、そしてあるクリスマススイブ」

「全然違うし」

「ゾンビの大群が突如大量発生した街を必死に走り回って、生存者が集う陸上自衛隊基地に逃げ込んだものの、空気に馴染まず、人々の制止を振りきって、また、ゾンビだらけの街中を走り回っている。大体、こんなものじゃないかな」

「後半は正解」信じがたいが、それが、先日から今日に至るまでの俺の、そして、日本の経緯だ。もしかしたら、世界中の経緯かもしれない。

「だけど、『ゾンビ』とか言うな、俺はまだ、信じてねえぞ」

「彼らが、ゾンビ以外の何者なのさ。あれは、ゾンビだよ。痛みを感じてなくて、集団で人を襲って、食べる。噛みつかれた人は、一日以内に、ゾンビになる。これが、ゾンビ以外の何者？」

「何回もゾンビゾンビ言ってる、ゾンビがなんなのか判らなくなるな」

「実は、俺はすでにそうなっている。ゾンビってなに？」

「俺は、シリーズ全部観たけど」

「一作だけ観たけど、映像が見えないから、面白みが伝わらなかった」

「全作、今の俺達みたいな目に会ってるだけだ」

「それはつまらない」

「いや、それが案外、面白い」

「でも、まさか、出演する羽目になるとは、思ってもみなかったでしょ」

「そうだな。しかも、ノーギャラかよ。おい、ロメロ、どうなったんだよ」

「ロメロさんに怒っても、しょうがない」

「この怒り、どこに向ければいいんだ。原因は、なんなんだよ」実際に、怒り、というよりも、呆れの感情値の方がずっと高かった。なんにせよ、「なんなんだよ」と叫ばずにはいられない。

「きつとあれだ。どこかで、悪いことを考えている奴がいるんだよ。ゾンビを世界中に撒き散らして、世界を征服しようと考えてる、悪い奴が」

「ゾンビだらけの世界を征服してどうするんだ」

俺達は、ビルの屋上にいる。

自衛隊基地から抜け出た俺達は、当然と言えば当然なのだが、直ぐにゾンビの大群に囲まれて、無我夢中に逃げている内に、この高層デパートに辿りついてた。

デパートに入った所で、猛攻は終わらなかつた。上へ上へと逃げている内に、気が付けば屋上にいた。不思議なことに、ゾンビの猛攻はそこで終わった。いや、中断した、と言うべきか、とにかく、小休止の時間が与えられた。

眼下では、ゾンビだらけの街が見えるが、通りを歩くゾンビ達は、殆ど点にしか映らず、生きた人間と変わらないようにも見えた。

「なんと、望遠鏡があるんだよね」

屋上について、一息を吐いた所で、タカハシが、自慢気にそう言った。

「なんでそんなもん持つてるんだよ」見えない癖に、と言う言葉は、寸前で飲み込んだ。

「さあ？ 自分でも判らないんだけど、さっき、アイツらに追われている時、余りに必死だったからさ、とにかく、手探りで武器を探してたんだけど」

「それが望遠鏡か」

「それが望遠鏡だよ。まあ、オモチャみたいなものだけど、見えるには見えるんじゃないかな」

望遠鏡を受け取り、眼下の世界を見渡す。ちょうど、通りに、生存者が走っていた。「あ」と俺は声を上げる。「誰がいる」

「ゾンビが沢山いるに決まってる」

「そうじゃなくて、生存者。 ああ、駄目だ、そっちは、駄目だったら」

見知らぬ生存者は、後ろのゾンビに気を取られる余り、行き止まりに向かって走っていることに、まるで気付いていない。教えてあげたい所だが、ここから大声を出した所で、気がつくとは思えない。「助けに行く？」

「無理だ」

「言ってみただけ」

そこから先の場面は、余り見たくなかつた。望遠鏡を置いて、それから、煙草を吸おうと胸ポケットに手をつ突っ込んだが、そこでラ

イターが無いことに気付いた。舌うちをしてから、座り込む。

「これからどうするの？」タカハシが尋ねてくる。楽しんでいる口調だった。「どうするのさ」

「休憩したら、俺はまた出かける」

「そんな、買い物に出かけるみたいな口調で」からからと笑う声が聞こえる。「ゾンビだらけの街を？」

「やらなきゃならないことがあるんだ」そこまで言ってから、質問されてばかりなのも癪に障ったので、逆に質問をしてやった。「お前は どうするんだ」

「俺は、まあ、迷惑じゃなければ、ついて行く腹積もりだけだ」

「余り言いたくはないんだが、正直に言うと、迷惑なんだ。目が見えない奴の手を引いてちゃ、戦い辛いんだよ」

「まあ、なんにせよ、着いて行くけど。見捨てるなら、それで構わないし」

「その、見捨てるって言い方がだな」そんな言い方をされて、見捨てる事が出来るほど、酷薄な人間ではないつもりだった。

「基地にいた方がよかつたんじゃない？」

タカハシは、尚もそう言った。俺は、「無理だ」と答える。

「どうして？」

「どうしても何も、アイツら、何を待ってるんだよ。救助とか言っただけど、来る訳ねえだろ。ゾンビの大群が、どっと押し寄せて終わりだ」

基地では、老若男女の生存者達が、ざっと三十人前後集まり、急造のバリケードを拵え、「ここにいる全員が力を合わせれば、きつと助かる」などと、熱弁を奮っていたが、どうしても、そうだとは思えなかった。平素ですら、力を合わせることの苦手な人間が、この極限状態で、力を合わせることなど、不可能だ、と感じた。

「先に、内部崩壊の可能性もあるし。食糧もねえ癖に、どうするつもりなんだ、アイツら」

「人類に退路なし、というやつだね。君はそれに気付いた訳だ」

「それに、俺みたいに、輪を乱すような奴、いねえ方がいいだろ」
「それも本心だった。俺、ガキの頃から、集団とか、クラスとか、苦手です。合唱なんかだと、『お前も歌えよ』なんて、みんなから指を指されてたっけな。俺なしでやってくれないかって気分だった」
「ああー、クラスに一人はいるね、そういう奴ね。合唱で歌わないし、積極的に意見も言わないし、体育祭なんて、来ないし、本当、迷惑だよな」

「うるせえよ。歌が嫌いだったんだよ。歌も、歌うのも、嫌いすぎ」
「言ってから、俺は、ラジカセを指差した。」

「でも、これはいいな」ラジカセから聞こえてくる、タカハシの言う、黒人ボーカルの歌声に、うつとりする。英語歌詞なので、なんと歌っているのか、正確には判らないのだが、ときおり、『クリスマス』と言っている辺り、クリスマスソングなのだろう。

「『君の罪は許される』」タカハシが言った。

「え？」内心、ドキっとした。罪を暴きたてられたような、驚きだ。

「そう歌ってるんだ」

「ああ、歌か」

「これ、誰が放送してるんだろう」

そう言われるまで、その考えには至らなかつた。そうか、ラジオから音楽が流れているということとは、どこかのスタジオで、曲を延々と流しながら、耐え忍んでいる誰かがいるという事なのか。

その誰かは、どんな思いで、この放送を続けているのだろうか、と少しだけ気になりもした。そこで、黒人ボーカルの歌は終わった。

少しだけ電波が乱れ、その後で、人の声。

『……ンビも、人も、動物も。聞こえますか』

「ゾンビとか言っちゃってるよ、この人」笑うべきなのか判らなかつたが、俺は笑った。

少しの間を置いて、それから、次の曲が始まる。今度は、俺も知っている曲だった。日本で、不動の人気を得た六人組みのグループの、新曲だった。クリスマスにちなんだ曲らしいが、旨いのか下手

なのかわからない。これも、英語歌詞だ。

タカハシはこの曲を知らないらしく、眉を潜めていた。俺は試しに、尋ねてみる。

「おい、これは、どんな奴が歌ってる」

「これも、黒人だね」

「そうか」

肩口の傷が痛んだ。デパート内でんやわんやと、千切っては投げ千切っては投げと、ハチャメチャに戦っていた時に、付けられた傷だ。いや、傷などと生易しいものではなく、まず間違いなく、この傷には、人を生ける死者へと変える雑菌が含まれていて、そのことを考えると、憂鬱になる。

個体差はあれど、ゾンビに傷を付けられた者は、それから一日も待たずに、ゾンビとなった。傷を付けられたのが、一時間程度前だから、まだ時間的余裕はある。いや、ないのか。残り、最長で二十三時間程度。長いようで、短いようで、最終的には判らない。

屋上についた当初は、『ゾンビになる前にここから飛び降りてやるるか』とも、一瞬だけ頭を過ぎったが、すぐに、そんな気は失せた。

「俺は今日中に、ゾンビになる」タカハシにそう告白したが、「ふうん」という素気ない答えが返ってきただけだった。

「ふうん、って、俺の、一代告白を」

「今この状況で、ゾンビにならない人の方がずっと少数派なんだから、自慢することじゃないよ。『あ、君もそうなんだ』程度の感覚だね。日本人が、日本という国内で、『私は日本人です』って言うてるのと、大差ないよ」

「別に自慢はしてねえよ。だからまあ、せいぜい、気をつけるよ。って話だ」

「ゾンビになる前に死ぬ気はない訳だ。気をつけるって言うくらいなら、俺に被害が及ぶ前に、自分でなんとかしてくれればいいのに。

俺なんて目が見えないんだからさ、君に襲われたら、一瞬でアウトだよ」

「お前には悪いけどよ、死ぬ気はねえんだよ。ゾンビになっても、生き続けてやる」

「なんという図太さ」

「人類が発展したのは、叡智のお陰でも、向上心のお陰でも、ねえ。ただ、図太かったただけだ。俺は図太く、生きれる所まで、生きていこうと思う」

ゾンビが、生きている、と言えるのかどうか、甚だ疑問ではあったが、そう言いきった。

世界はゾンビだらけで、ゾンビになっていない多くの人はすでに死んでいるか、これからゾンビになるか、そのどちらかだと言うのに、不思議なことに、俺は落ち着いていた。多分、空が青いからだ。地上が地獄と化しても、空の青さは変わらない。それを、頼もしくも思えるし、無慈悲だなと笑い飛ばすことも出来る。

空はのっぺりと広がっていた。

ラジカセ（後書き）

他に連載も書いていたのですが、ちょっとだけここで寄り道をさせてください。

全、四〜五話程度の中編の予定です。

実は完結済みなので、推敲が完了次第、次々投下していきます。

コーラ

半日程前、俺は別の生存者と一緒にいた。俺より少し年上である若い男と、俺より明らかに年下の、少女とも言える年代の子と、一緒だった。

俺達は、コンビニに押し入り、元店員だったゾンビをあーだこーだと騒ぎながら薙ぎ倒し、それから商品ラックの裏で、息を潜めながら、「これから」の算段を立てていた。

その時は、ラジカセはまだ音楽を流していなかった。

この騒ぎの中、どうやってその噂を聞きつけたのか、それは判らないが、若い男は、『自衛隊の基地に大勢の生存者達が集まっている』としきりに熱弁していた。

「でも、噂なんだろ。大体、誰から聞いたんだよ」

「誰からだっついていいだろ」男は、そこだけ口をもごもごと動かした。「っていつかさ、自衛隊って、こういう時の為にあるんだろ」

「いや、ゾンビの大量発生なんて事態には、流石に備えていないと思う」

「でも、行く価値はあるって。そうだろ。そんなに離れてないし」と、男は地図を広げた。地図上では三キロの表記だったが、三キロという長さは、今の状況を鑑みるに、絶望的な長さには思えた。

車でも使えれば、あつという間の距離かもしれないが、道路の状況は、絶望的なほど悪かった。車は、列を作るからこそスムーズに流れるもので、今、このパニック状況の中で、順番を待つ、などと紳士然とした運転をする人間はいない。クラッシュした車が、けたましい警報音を流しながら、道路中に溢れている。

「大丈夫、アイツら、動きは遅いから」

男はそう言ったが、それは、半分正解で、半分間違いだ。

確かに、殆どのゾンビの動きは緩慢で、圧殺するかのような群れでじりじりと、歩きながら迫ってくるだけだが、その中に、稀に、

一体どういった基準があるのか、全力疾走で追ってくるゾンビが紛れていることがある。

俺はそのことを男に告げたが、男はそれでも「大丈夫だ」と言い張った。

「速い奴は、レアじゃないか。会いたいって思っても、中々会えねえよ」

「会いたくない時に限って、会ったりするんだよな」

直後、ガラスが割れる音が聞こえた。「来た」と、少女が震えながら言う。「来たよ」

「どの道、行くしかないんだ」男は、決意を秘めた目をした。「頼む、協力してくれ。この子を守らないと」と、少女に目をやる。

俺は、商品ラックの影から、外を見やった。ゾンビが、一、二、三、四、五、数えたくない程度には、いる。「行くしかないんだ」と男がまた言った。

そして飛び出した。氣勢を上げ、バットを振った。なんの因果なのか、彼が持っているバットは、いわゆる釘バットと言われる凶悪な品物で、その効果と言えば、なかった。「どこでそんなものを」と前に聞くと、「こんなこともあるうかと、作っておいたんだ」と自慢気に歯を光らせていた。

もう一つ、怖いことと言えば、その男は明らかに、人を殴ることに慣れていた。いや、ゾンビは人ではない、という見方もあるのかもしれないが、とにかく、人の形をしたものを、躊躇いもなく、釘バットで殴っていた。

どちらかと言えば、大人しく見える容姿の青年だが、人を殴る瞬間に上げる、奇声とも、氣勢ともつかない声は、迫力があり、聞いているだけで委縮しそうになった。「オウラー！」とも聞こえるし、「ノウラー！」とも聞こえる。

ちなみに、今は前髪で隠れているが、剃り込みも発見した。

「お前、ゾクだろ」と前に聞くと、「そういう時代もあったかもし

れない」と、やはり歯を光らせていた。

その、元ゾクの青年がゾンビを二人程蹴散らした後、少女がおっかなびつくり続いた。俺も続く。手には、ボールを持っていた。

道路に飛び出した。

ゾク青年が、勇敢に戦っている。早くも返り血にまみれ、赤く染まっていた。「来いよ」と、軽快にこちらを振り向き、誘っている。その直後、後ろの車に影に隠れていたのか、女性のゾンビが飛び出してゾク青年に襲い掛かっていたが、彼は振り向きざまに頭を打ち抜き、呆気なく撃退した。

相談した訳ではないのだが、俺は、少女の護衛、という形になっていた。「目を瞑ったほうがいい」と忠告するが、少女は首を振って、小走りで、ゾク青年を追った。

俺達の速度は、少女の速度だった。少女の速度以上速く走る訳にもいかずに、どちらかというところ、のんびりとしている、と言える速度で、先に進む。

通りには、数多くのゾンビがいるが、一斉に襲ってくることはなく、散発的だった。食事に夢中になっているゾンビもいるし、こちらに気付いて目を向けたとしても、おっとり刀で駆けつけようと、のろのろと歩いているだけだ。それも、障害物、車や、標識などにぶつかって、よたよたと勝手に倒れるやつもいる。

銃声が聞こえたのは、俺がボールをゾンビの頭に叩きつけ、抜けなくなつて手を離してしまった直後だった。乾いた音が、二回、響いた。

正面の十字路の、左側から、警察官がゾンビに押し倒されながら現れた。声にならない声を発しながら、また、銃声を一回だけ響かせ、次の瞬間には手から拳銃が滑り落ちていた。

そのゾンビの群れに、見知った顔があった。俺は、顔を背ける。

警察官が悲鳴を上げていた時間は、短かった。

ゾク青年の動きは、その時も素早かった。何かの必要性を感じたのか、突然駆け出し、地面を滑っている拳銃に手を伸ばして、それ

を赤子のように抱きかかえると、その場を離脱した。ゾンビの手が伸びていたが、触れることも出来ない。

「拳銃だ！」ゾク青年は、目前で襲われている警察官には目もくれずに叫んでいた。「拳銃だぞ」と、大物を釣った釣り人のようにはしゃぐ。

俺達は、まごまごと群れている、警察を襲ったゾンビの群れを右へ迂回しながら、その場を通り過ぎた。

「拳銃だぞ。初めて触った」

ゾク青年は、興奮気味だったが、俺はその武器が役に立つとは思えなかった。狙いを定めている時間があるのなら、がむしゃらに鈍器を振っていた方が、この場を乗り切れる気がする。

「それ多分、役に立たねえよ」と俺は小走りを続けながら忠告する。走りながら、自分の手持無沙汰に気付いて、道端に落ちているコーラの缶を拾って、通りにいるゾンビに投げた。こん、と頭が揺れたが、案の上効果はない。

「お前が持つてるよ」と、ゾク青年は拳銃を押しつけてきた。

「どうやって使うんだよ、これ」

「狙って、撃つだけだ。大丈夫、お前ならやれるって」ゾク青年の『大丈夫』に根拠を感じなくなってきたが、手持無沙汰なものも確かな為、ありがたく受け取ることにした。

そんなゾク青年の最期は、思っていたよりもずっと呆気なかった。俺達はゾンビをすったもんだと薙ぎ倒しながら、えっちらおっちら、と言える速度で、しかし順調に進んでいたのだが、自衛隊基地が目に見えた直後に、気が緩んだのか、ゾク青年は噛まれてしまった。

足元だった。完全に活動を停止しているように見えたゾンビが、突然ゾク青年の足に手を伸ばし、ゾク青年が倒れたと同時に、足元に噛みついていった。

ゾク青年は、悲鳴一つ上げなかった。が、一瞬だけ、顔が陰った。

かと思うと、静かな怒りに声を震わせ、「何してくれちゃってんだよ」と言った。

俺は急いで、足元のゾンビの頭を蹴飛ばした。驚くほど簡単に首が折れて、今度こそ、ゾンビは活動を停止した。

その後で、ゾク青年は足を擦りながら、ゆっくりと立ち上がった。その横では、少女が、ゾク青年の身に起こった悲劇を思っただけ、涙を流していた。

「掛ける言葉もねえけどよ」と、俺は言う。

「掛けてんじゃん」と、ゾク青年は笑った。自然な笑みに見えた。

「まあ、こうなっちゃ、仕方がねえ」

「大丈夫だ。もう、基地も近いし、治療を受ければ、なんとかなるかも知れない」

「なんともならねえよ。銃を貸してくれないか」

俺は了解した。腰から拳銃を出して、渡す。直後には、ゾク青年が、ゾツとするような笑みを向けてきて、言った。

「さよならだけがなんちゃらだ」

その後は黙って、口に銃口を突っ込んで、死んでいった。

この潔さは、俺にはない。

タカハシと出会ったのは、自衛隊基地の中でだった。

俺と、ゾク青年が連れていた少女が突然、何者かに手を引っ張られ、何事か、と振りむいた先に、見知らぬ中年の夫婦がいた。

どうやら、奇跡的な再会だったらしい。少女は、二人にしがみついて、俺とゾク青年の活躍をやや過剰に話していた。二人は、地面に埋まりそうな程俺に礼を言って、去っていった。少女の後姿を見ながら、「さよならだけがなんちゃらだ」と呟く。

そこで、ドッと疲れが押し寄せてきた。一般市民の生存者の殆どは、この、体育館のような場所に集められているらしいが、殆どが老人、女性、子供で、男は殆どいなかった。たぶん、銃器を渡されて、見張りにでも立たされているに違いない。

少し眠って、それからこれからの算段を立てるつもりだった。この時点で、俺にはこの場に留まる、という選択肢はなく、見張りの自衛官に事情を説明して、再び街に足を踏み入れるつもりだった。

だが、その前に、身体を休ませなくてはならない。そう強く感じてもいた。疲れで弱っている所為なのか、黒々とした、憂鬱の波が身体中に蓄積されていて、今は、一歩でも動けない。

「もしもし」と、突然声を掛けられても、最初は無視した。「なあ、君」知らない男の声だ。

「もしもし」「聞こえてるでしょ」「なあなあ」と、執拗に、声を掛けてきて、俺はいよいよ根負けした。なんだよ、と声の主を睨む。それが、タカハシだった。正面に、上から見下ろしてくるような形で、立っていた。

「なんだよ」

「ちよつと、さっきの話聞いてただけど、あの子を助けたって？英雄的だね」そう言う男の視線は、きよるきよると落ち付きがない。

「俺じゃねえよ。一緒にいた、ゾクの奴が張り切ってたから、そのお陰だ」

「ゾク？ 変わった名前だ。俺は、タカハシと言って、日本ではかなりメジャーでしょ。そういう変わった名前に、憧れもあつたりするんだけど」

俺は、べらべらと話しかけてくる男に、どういう態度を取っているのか判らずに、戸惑っていた。視線がひっきりなしに動いていて、正直な所、不気味さを感じていた。

「なんの用だよ」我慢ならずに、喧嘩腰の声を出した。

「いや、君の声が聞こえて」慌てた様子を見せて、それから言った。「聞き覚えのある声だと思って」

「声？」

「俺は、目が見えないんだ。だから、耳で物事を判断する。以前に、どこかで会ったことはないかな」

目が見えない、という説明には、合点がいった。きよるきよると動く眼球は、確かに光りを宿していないように見える。

ただ、会ったことは、ない、と思う。「いや、人違いだ」

「本当にそうかな」その時、ふと、タカハシの目が光ったように見えた。「君が忘れてるだけかもしれない。目を覚ませ」

「目を？」

「目を覚ますんだ」

「目を覚ませ」

どこからか、現実味のない声が聞こえる。「目を、覚ませ」と執拗に語りかけてくる。「何を、暢気に寝てるんだよ。こんな時に」慌てて、目を覚ました。寝ちまつたのかよ、俺は。腕時計で、時間を確認する。二時間ほど、時間が跳んでいた。

「よくこんな状況で寝ていられるね」タカハシが不貞腐れているかの様子で、言う。「俺は、緊張で、とてもじゃないけど、寝れないよ」と、軽やかな口調で続けた。

「ハッキリとは判らないけど、大変なことになってるんじゃないかな」

タカハシが、肩を上げた。「ハッキリとは判らないけどね」

「なんだよ、大変なことって」まだ、身体に眠気が残っているが、それを無理やり払いのけた。寝ている場合ではないのだ。

「この音、聞こえる？」

「音？」

「耳を澄ませば、聞こえる筈だけど、君の場合、目で見た方がずっと早いかもしれない」

言われて見ると、風の音に混じって、地響きのような音が、聞こえる。なんとも言えない、呻き声も混じっていた。「なんの音だ」

「それを説明してほしい。音だけじゃ、なんとも言えないんだけど」

俺は、屋上の金網にしがみ付いて、街の様子を確かめたが、直ぐに、殆ど反射で、後ろに下がった。「おいおいおいおいおいお

「おい」と、呻き声を上げる。

「どうしたの？」

「いや、すげえことになってる」

「今よりも凄いいことって、中々想像がつかないんだけど」

「アイツら、一斉に動いてやがる」

ゾンビ達が、規則正しいとさえ言える、整然とした様子で、一斉にどこかへ向かっていった。誰かが音頭を取っているとは思えない。真下を見ると、俺達がいるデパートから抜け出て、列に加わるやつ姿も見えた。

「どこへ向かってるんだ」俺は、そう言ってから、気付いた。「自衛隊だ。アイツら、自衛隊基地に向かってるんだ」まさに、ゾンビの群れの進む方角に、つい四時間程度前まで、俺達がいいた基地があった。

「この辺は、食いつくしたってことか。で、餌箱に目を向けた訳だ」「君の予言は当たった」

「っても、あんなに大人数じゃ、自衛隊基地でも食いそびれるやつが大半だ。そうしたら、どうするつもりなんだ。どうするつもりなんだよ」

「どんな光景？」

「地獄みたいだ」

「そうか、目が見えなくてよかった」タカハシは優越感を滲ませた。「だけど、これ、チャンスだ」

俺は、堪らずに、そう口に出していた。「ここから出られる」

「危うく、ゾンビになるまで、ここで立ち往生する所だったね、よかったじゃないか」

手放しで、よかった、と言う訳にはいかない事態なのだが、俺は、心底、感激していた。

「俺はいかないと。おい、タカハシ、お前、本当についてくる気か」「そこで、一応俺に聞く辺りが、善人だね」

「見捨てるつもりはねえよ。いや、っつーか、お前、ここにいるも、

死ぬだけだし、俺といても死ぬだけだし、手詰まりだよな」

「君ほど手詰まりじゃないよ。俺なんて、君に比べたら、まだまだだ。君は凄過ぎる。なんてったって、ゾンビになる一歩手前だ」

「俺より凄いやつが、大移動を始めてるんだ。俺なんて、まだまだ」

そこで、タカハシが、尋ねてきた。

「ところで、やらなきゃならないことって、なに？ 今、この状況で、人類にやらなきゃならないことがあるなんて、俺には信じがたいけど」

「姉ちゃんを見かけたんだ」隠すこともないので、俺は言う。

「え？ どこで？ つつーか、君、一人っ子じゃなかったっけ」

「それはお前が勝手に決めた俺の設定だ。本当の俺には、姉ちゃんがいるんだよ。しかも、お姉ちゃんっ子だし」

「へえ、美人？」興味があるのかないのか、そんな事を尋ねてくる。

「俺が言うのもなんだが、美人だぜ。まあ、昨日は、ちよつと警察官を食べちゃってたけど」

「すべからく姉というものは、いつでも弟よりも一歩先に行っている訳だ」

「まあな。あんな姿を見るのも忍びないし、弟として、俺に出来ることなんて、殺してやることくらいしかねえだろ」

「この広い街中で、お姉さんを探して殺すの？ それは難しいんじゃないかな」

「判ってる」

「もう一つ言わせて貰えば、多分、お姉さんも、君が手を下すまでもなく、その内勝手に死ぬと思う」

「それも、判ってる。だけど、俺には必要なんだ」

「お姉さんを殺すことが？」

首肯した。今の俺には、姉殺しが必須だった。姉ちゃんを救うんだ。という思いに支配され、それ以外のこと、例えば、ゾンビの大群に襲われる自衛隊基地や、一緒にいるタカハシの運命などには、然して興味が持てなかった。

自分に残された時間を考える。残り二十時間程度か、それとも、もつとずつと短いのか。ハッキリとしたことは何一つ判らないが、とにかく、今の所、身体に不調はない。肩口に痛みはあるが、むしろ、痛みがある内は、大丈夫なような気がした。

「とはいえ、時間はねえ。行こうぜ」

俺はタカハシの腕を掴み、引つ張り起こした。「まだ、デパートにもアイツらがいるかもしれないな」

「いや、絶対いるよ。正直な所、ここから外に出られるのか、それが甚だ疑問だ」

「まあ、見てろって」

「判った」とタカハシは笑った。焦点のあつてない自分の目を指差して、「見てるよ」と言った。

屋上の扉に手を触れたと同時に、なんの気なしに気付いたことがある。

「音楽」俺は、今まさに気付いたことを口に出す。「聞こえないな」と、ラジカセに目をやる。電源は入っている。が、聞こえるのは、かすかなノイズの音だけだった。

「判らないけど、君が寝てる間に、突然放送が終わった」タカハシは、初めて寂しげな表情を見せた。

何が起こったのか、想像するのはそう難しくはなかった。「そうか」と呟き、名前も知らない誰かを思うことにする。

スイング

お前は、なぜ、俺についてくる。

俺が初めてそう尋ねたのは、階段の踊り場で、ゾク青年の形見とも言える釘バットが、ひとまずの出番を終えた後だった。

「理由もなくついて来てるわけじゃねえんだろ。それくらい、判る」俺は、タカハシの前を歩く。タカハシは、目が見えていないにも関わらず、悠々とついてきた。

「俺にも、俺の目的があるんだよ」踊るような足取りで、階段を下る。一段落がついた訳ではないのだが、彼は、落ち着いていた様子で語りかけてきた。

俺は先に進む。釘バットが、唸る。「今となつては可愛い話だけど、一年くらい前かな、あつただろ、強盗殺人事件」釘バットを、唸らせる。

「知らねえよ」俺は答える。釘バットは唸る。ゾンビが往行する世界で、強盗殺人事件の話をする事になるとは、思わなかった。「それがどうした」

「俺、被害者なんだよ」罪状を読み上げるかのような口調だった。

「つていうか、被害者遺族だけど」

「出来るだけ簡潔に頼む。俺、実は、結構忙しいんだ」言いながら、可笑しさもこみ上げてきた。「ゾンビ退治で」

「犯人は捕まった」階段を降りながら、言う。「つい最近だよ。で、昨日、ゾンビ騒ぎが起こる直前に、連行されてた」

まるで、見ていたような口ぶりだな、と感じながら、俺は尋ねる。「その瞬間を見たのか？」

「見た、というか、聞いていた。俺の家族を殺した奴の足音と、呼吸の音と、声を」

俺は階段をジャンプして、踊り場にトン、と着地する。「へえ。わざわざ、ごくろうだったな。で、お前は、復讐心をメラメラと滾

らせたわけだ」

「そうだね。と笑い声。「足音と、呼吸と、声を聞いている内に、俺に復讐心が芽生えた」

「メラメラと」俺は釘バットを振る。

「メラメラと」タカハシも着地する。

「で、ゾンビ騒ぎが起こって、犯人は逃げ出したんだな」俺は知つた口を聞く。「そうだろ」

「そう。犯人は、騒ぎに紛れて、逃げた。俺はもちろん、その瞬間も聞いていた。追いたかつたけど、追いつけるわけないし。大体、始めはパニックで、何がなんだがよく判らなかつたし」

「そこでタカハシが吹きだした。「誰かが、『ゾンビだー！』って叫んだんだ。あれは、判りやすかつた。それで状況が判つた」

「判りやすいな」

「『ゾンビだー！』なんて、一生の内に一度とはいえ、本当に聞くことになるなんて」タカハシは笑いを堪えていた。「笑つちや駄目かな」

「今や世の中はなんでもアリだ。気にすんな」釘バットで、ゾンビの頭を叩き割りながら、これもアリだろ、と感じる。

「お前はその犯人を、どうにかしてやりたいと思つてる」俺は、やはり釘バットを振りながら、言った。ゾンビを倒す作業が、反復作業のような単調さになっていた。こんな仕事があれば、俺も人生を踏み外さなかつたかもしれないな、とこっさり思う。

「どうせ、その男も、とつくにゾンビに噛まれてる」俺はそう忠告してやつた。

その時、突然、誰かが横から飛びかかってきた。誰かが、というよりは、それは案の上、ゾンビだ。声にならない絶叫を上げ、こちらの首元に、歯を伸ばす。

「あ、大丈夫？」頭上から、暢気な声が聞こえてきた。「やばい？」揉みあいのような形になった。こんな状況では、自慢の釘バットも使えない。俺は無理しやり、力技でゾンビを引き離そうと暴れる

が、その間に、爪が腕に刺さってくる。「いつてえ」と、眩き、右腕を払った。殴る。殴る。殴る。殴る。暴力を、振う。それから釘バットを振り上げ、頭に振り下ろす。ゴン、ゴン、と耳を閉じたくなるような、鈍い音が聞こえてくる。何度も、何度も、繰り返す。ゾンビを殴っている間、頭の中では、なぜか、例のラジカセから流れていた、黒人シンガーの歌が流れていた。歌詞は判らない。リズムと、音程だけが、繰り返りリピートされている。『君の罪は許される』

君の罪は許される。君の罪は許される。鼻歌を歌いながら、俺はとうに動かなくなっているゾンビを、殴っていた。なぜか涙が出た。「見えないから判らないんだけど、もしかしたら、もう動いてないんじゃないかな」タカハシが指摘してきた。判ってはいるのだが、俺は、今気付いたと言わんばかりの演技をして、「あ」と言った。「俺、この仕事、向いてるんじゃないか」動かなくなったゾンビを目にしながら、俺はそう口に出していた。「才能があるんだ」「人の頭をかち割る仕事？」タカハシの声には、どことなく悪意が滲んでいた。「あるかも」

単調作業に疲れていた所為か、一度間違えて地下まで下りてしまったが、幸い直ぐに間違いに気付いて、俺達は無事、一階に辿りついた。デパートの中を見渡す。ゾンビが点在しているが、素早く動けば、特に問題はない。

「思ったより楽だったね」タカハシが、無然と声を出す。「いや、俺は死ぬほど大変だった」それから外を見やる。

入口に向かう手間を省く為に、ショーウィンドウに駆け寄って、俺はバットを振るった。ガラスが呆気なく碎け散る。「おい、ガラス、気をつけるよ」と、タカハシに声を掛けた。

俺は、ショーウィンドウの段差を飛び超え、着地する。その時、思わず、手をついてしまった。ガラスの破片が手に刺さる。おい、気をつけるって言った本人が。と自分を馬鹿にするが、痛みがない

ことに気付いた。

肩口の傷が、痺れている。引つ搔かれた傷の痛みも、なくなっていた。俺は、自分の掌を、グー、パー、グー、パーと動かし、まだ自分の身体が自分のものであることを確認する。

その後で、タカハシが続いてくる。街に降り立った。

真冬だというのに、街は、意様な熱気に包まれている。実際に、至る所で火災が起きていて、その所為というのものもあるのだが、それ以外にも、気配、というべきか、空気というべきか、いつそ、人々の思いというべきなのか。そういった、目に見えない呻きが充満していて、それが熱を持っていくように感じた。

乗り捨てられた車や、事故を起こして立ち往生している車の列の、遙か奥。群れをなして動く、ゾンビの大群が見えた。望遠鏡なしでも、うつすらとだが、見える。列はますます膨れ上がる。俺達には興味がないのか、全員が、背を向けている。

一体どれほどの列なのだろうか。と想像してみても、嫌になる。

「凄い音だ。あの大量を、追っただろう？」タカハシが尋ねてきた。「どう考えても自殺行為だね」

あの列の中に、姉がいる確率は、それなりに高い。ただ、列そのものの巨大さが馬鹿にならない為、姉探しの作業は、間違いなく、砂漠で針を探すような苦行になるだろう。

「俺は、姉ちゃんと再会出来るかな」漫然と、そう聞いた。タカハシに尋ねたのか、それとも、自分自身に尋ねたのか、判らない。

「確率はかなり低いだろうね」

「俺は馬鹿だろうか」言いながらも、俺は歩きだしていた。立ち止まっているわけには、あらゆる意味でいかない。少し先に、よたよたと歩くゾンビがいたので、わざわざ駆け寄って、薙ぎ払った。ゾンビは、車のバンパーに寄りかかるような形で倒れ、もう一度、とドメを振るった。

俺達は先に進む。

釘バットを闇雲に振っている間は、決まって、黒人シンガーの歌声が頭の中で響いていた。ジャズとも、スイングともつかないリズムの、歌だ。この歌が聞こえなくなった時こそが、俺の終わりの時なのだろうな。と気付く。

「さっきの歌？」タカハシが尋ねてくる。自分でも気付かなかつたが、鼻で歌っていたらしい。

「ああ。あの歌は、スイングかな、ジャズかな」尋ね返す。「スイングか？」

「スイングだ。今の君には、スイングこそが相応しい」「なんでだよ」

「バットもスイングしてるから」

「タカハシ、お前、親父過ぎ」苦笑せざるを得ない。「若い内からそんな寒い事言ってる、禿げるぞ」俺は、自分の武器を高く上げる。

「大体、これ、バットじゃないし」

「バットじゃない？」

「これ、釘が刺してあるんだよ。もう、バットとしての機能は、ねえよ」言いながら、俺はまた、ゾンビを殴る。というか、すでに、動くものはなんであれ殴ってみる、と方針を固めているため、自分でも何を殴っているのか、正確には判らない。

「バットに釘を？ 酷い奴だ、君は」タカハシは呆れていた。「そのバットも、釘を刺される為に生まれたんじゃないだろうに」

「俺がやったんじゃないよ。ゾクがやったんだよ、ゾクが」言いながら、ゾク青年が、必至に、バットに釘を刺しているシーンを想像すると可笑しかった。

「夜なべして、頑張って作ったんだよ、馬鹿にしてあげるなよ」

「ゾクさんか、それは仕方ないね」タカハシは不思議と納得した口調だった。

身体の異変に気付いたのは、有名なファストフード店前、ピエロ

に模したキャラクターの等身大の人形を、ゾンビと間違っ
て叩き割ってしまった。「紛らわしい格好をしているからだ」と人形の残骸に向かつて忠告をした直後だった。

心臓が跳ねあがった。かと思うと、脈動が狂ったように速くなり、身体中に痛みとも衝撃ともとれる信号が駆け巡った。思わず膝を付く、いきなりかよ、やべえ、と口から零れた。身体が興奮状態にあるにも関わらず、頭は「眠い眠い」と虚ろに囁いている。

黒人シンガーの歌を歌わなければならない。いや、そもそも、本当に黒人なのかどうかは不明だが、とにかく、あの歌だ。と俺は何度も念じ、「君の罪は許される、君の罪は許される」と呟いた。リズムを思い出すんだ。と言いついて聞かせる。

ラジカセから流れていた、あの音楽を思い出す。苦難を乗り越えた、目の見えない黒人の、歌だ。クリスマス、君の罪は許される。彼は、そう言ってくれたじゃないか。

俺は、立ち上がり、また前を目指す。後ろから、「大丈夫？」と尋ねてくる声。大丈夫だ、と自分とタカハシに言い聞かす。

まだ、大丈夫じゃないと困る。俺はスイングを、する。

シンガー

君こそ、なぜ、俺を見捨てないんだ。

タカハシが初めてそう尋ねて来たのは、俺がショーウィンドウに映った自分の姿に発作的な恐怖を感じ、叩き割った直後だった。

光を宿していない筈の目にゆらっと揺れる炎を見た気がした。目を背けたのを見られなくて幸いだ。

「知らねえよ。止まってる暇はねえぞ」

「知らない訳がないだろ」タカハシは、動かなかった。その影から、これ幸いと言わんばかりのゾンビが現れて、俺はスイングをする。

「来い。早く行こうぜ」

「君はいつでも俺を見捨てる事が出来た」詰問するような調子だった。人を試すものの口調だ。

「本当に知らないんだ」俺は、事情聴取を受けている時の事を思い出していた。あの時も「本当に知らないんだ」と口に出したが。あの時の「知らない」は嘘で、今の「知らない」は、本当だ。

俺は、なんの算段をもつて、タカハシを見捨てて先に進まなかったのか。

地響きの音が聞こえる。

タカハシがようやく歩き出した。目が見えないにも関わらず、その歩き方は自信に溢れていて、揺るがない。いや、目が見えないからこそなのか。彼は、この地獄を見ていないから、怖れていないのか。

「俺が足手まとい以外の何者だ？」

「うるせえよ」スイングをしながら、答える。「今更、何を言ってるやがる」

「俺がいなければ、もしかすると、君は目的を達成出来たかもしれない」

地響きの音が聞こえる。

「別に、まだ終わった訳じゃねえだろ。おい、俺は生きてるじゃねえか」

「直ぐに死ぬ」

地響きの音が。

「お前こそ」

俺は、言わずにはいられなかった。

「お前こそ、俺がいなければ、違う人生を歩んでただろうが。せめて、家族と一緒に終末を迎えることが出来たんだ。お前、なんで、俺を殺さねえんだよ」

タカハシが俺を殺すチャンスは、何度もあつた筈だった。屋上で俺が寝込んでしまった時でもいい。あの時彼は、俺に向かってなんと言った？ 目を覚ませ。と、俺に呼びかけなかったか？

タカハシは答えなかった。俺は、横に並ぶ。「答えろよ」

そうは言つたが、返事を待つ余裕はない。地響きが間断なく聞こえる。

今の今まで、俺達を守つていた巨大な壁が崩落したかのように、アスファルトを踏み仕切る足音を響かせて、洪水のような群れが押し寄せてきていた。

タカハシは、群れに向かって悠然と歩いていた。

「くそ」自然と悪態が出てくる。「どうにもならないことくらい、知ってるって」

諦観のような、爽観のような、複雑な気分だった。

「なんなんだよ。アイツら、これ見よがしに、馬鹿じゃねえの。たつた二人だぞこっちは、一人は全盲で、一人は半分死んでるんだ。俺達なんて放つておいて、基地に行けよ基地に」

まだ、距離はあるが、一步、一步、と着実に、列の先頭は迫ってくる。

あの緩慢な動作を見る限り、その気になれば、つまり、回れ右をすれば、逃げきれないことはないのだろうが、逃げる気にもならなかった。

俺は、近くにあつた空き缶を手にとつて、それを思いつきり投げた。届きもしない。

「バーカ」と叫んだ。「お前ら、バーカ、アホ、アホ、マヌケー！」頭の中で流れているのは、やはり、黒人シンガーの歌声だ。

「俺の復讐なんて、君が噛まれて時点で終わつてたんだよ」

タカハシがようやく口を開いた。「あの時、君、俺を庇つただろ。俺を庇つて、噛まれた」

「知らねえよ」

「見えなくてもそれくらい判るんだ」

「お前は立派だよ」

「耳がいいんだ」

俺は首を振る。今度は小石を拾つて、大群に向かって投げていた。今度は、山なりに、威力よりも飛距離をイメージしていた。小石は、大群に飲まれて消えた。

「決めつけるなよ。お前を庇つた覚えはねえよ」

「まあ、仮に君が俺を庇つたとして、だからって、君を許せるわけじゃないんだけど」

「何が言いたいか、全然判らねえ」

「俺もだよ。俺も、何がなんだか」

と、タカハシが肩を上げた。

タカハシの足元に、野球ボールが転がっていた。意識していた訳ではないだろうが、タカハシがそれを蹴る。俺は、小走りでそれを拾う。

「野球ボールだ、野球ボール」なぜか、嬉しかった。「おい、タカハシ、野球ボールだぞ」

「君が、そうやって、無自覚なのか、ワザとなのか知らないけど、突然話を飛ばすから、俺達の会話は弾まないんだ」タカハシに笑われた。

一度立ち止まり、釘バットを置いた。野球ボールを強く握つた。投げるという意味合いなら、空き缶よりも、小石よりも、遙かに相

応しいものに思えた。

正式なピッチャーの投げ方など知らなかったが、とにかく、前へ、ワンステップ、ツーステップとリズムよく駆け出して、肩を回し、叫ぶ。

「おい、お前ら、スイングしてみろよ」
野球ボールも大群に飲まれて消えた。

「罪は、死によって償われるべきものじゃないんだ」波に飲み込まれる直前、タカハシがそう言った。

「死は、万物の生命、全てに平等に用意されている、当然の結末だ。そんなものが罰になるとは、思えない」

俺は、タカハシの家に押し入った時のことを思い出していた。タカハシの家族を、殺した時のことを、思い返していた。

「俺は君をどうしたかったのだから」
俺達は波に飲まれた。右にも、左にも、後ろにも、前にも、理不尽な波のうねりがあった、あらゆる場所から手が伸びてきて、抗うことが出来ない。絶叫とも、咆哮ともとれる声が、あちこちから響く。

そんなときでも、黒人シンガーは歌っていた。まだスイングしているのか、お前、凄じやねえか。と、俺はこっそり思う。そう思う俺は、すでにスイングが出来ていない。

まだ、手には釘バットが残っていたが、それを振うには、スぺースがなかった。もみくちやに手が伸びてきていて、至る所を引っ掻かかっている。痛みはない。

タカハシ、どこだよ。俺は虚ろな目で、自分の人生にとっての、最後の友人を探す。「どこだよ」と小さく呟くが、声も、飲まれて消えた。

体温を失っている筈の死者達の身体から、確かな熱を感じた。熱い。引き裂かれて殺される所か、圧死か、熱死しかねない。それほど数だった。

音楽が途絶えた。恐怖や絶望よりも、喪失感の方が大きかった。最初は慌て、苛立ち、頭の中で黒人シンガーの声を再生しようと思っただけ、出てくるのが不協和音としかとれない不快な音ばかりで、聞いている方が辛かった。いっそ、消えてくれ。と思った時には、本当に音楽が消えて、真っ白になる。

自分の身体がどうなっているのか、まるで判らない。押し寄せてくる波の一部になったような浮遊感がある。

ここまでだ、と思ったと同時に、四方から伸びる手に魂を握られ、そのままどこか、別の場所に連れ去られていく感触がある。それが心地よくすらあった。身体中の血が、別の何者かの血と入れ替わって行く。変貌が始まり、それで俺は消えていくんだ、と理解して、波のうねりに身を任す。

「……ゾンビも、人も、動物も。聞こえますか」ノイズ混じりの声が再生されている。聞こえねえよ。と思った。「さよならだけがなんちゃらだ」本当にその通りだ、と納得し、目を瞑る。

クリスマス、君の罪は許される。

動物的な反射だったのかもしれない。身体が勝手に動いていた、力を振りしぼり、俺は自分にすぎる手を振りほどき、上体を大きくのけ反らした。かぁん、と、釘バットの先端が、アスファルトに当たる感触がある。

振り子のように、上体を戻しながら、真上から一直線、地面を叩き割るくらいの心持で、俺は釘バットを振って、ちょうど正面にいたゾンビの頭に叩きつけた。

その、奥、距離にして三メートルも離れていない距離に、姉ちゃんの影を見つけた。

いや、本当に、それが姉ちゃんだったのか、正直に言えば判らない。波のように迫りくる大群の中で、顔を識別するのは難しかった。

し、そもそも、こつも都合良く、姉ちゃんと再会が出来るほど人生は甘くない、という程度の知識は、経験として知っていた。

どこからか歌が聞こえた。頭の中ではなく、外だ。耳を通して、鼓膜を揺らし、確かに聞こえてくる。黒人シンガー、近くにいるのか、と始めは思い、それがタカハシの声だとは、直ぐには理解できなかった。

俺は自分の腰に手を回す。その間にも、再び波が俺を呑みこもうと迫ってくる。拳銃を出した。それを前に突き出すような形で、手を伸ばす。

身体が浮いている。比喻ではなく、本当に、四方から掴む手に担ぎあげられ、足が地面から離れた。歯を食いしばり、俺は手を伸ばす。邪魔だてするようなタイミングで、ゾンビが左からぬつと顔を出したが、残った左手で強引に払った。

それから、姉ちゃんを見る。面影はない。聞こえますか、と言った。さよならだけが、と言って、それから指に力を込めた。

ぱぁん。と、乾いた音が聞こえて、それもやっぱり、波に飲まれて消えた。

やがて意識が遠のいていく。雑多で、吹き荒ぶ嵐の中にいるような状況であったにも関わらず、静かで荘厳な海の底に沈んでいくような感覚だった。呼吸が出来ない。

ふと空を見ると、いつの間にか日は陰っていて、雲が出ていた。

青空は掻き消えて、分厚い雲だけが見えていた。だけど、あの雲の向こうには、青空は広がってるんだよな、と考えることにする。

ライヴ

「毎年判らなくなるんだけど。クリスマスって何日だった。クリスマスイブが二十三日で、クリスマスが二十四日？」

「一日ずれてますよ」私は、そう指摘してやった。「先輩、クリスマスと縁がない人間でしょ」

先輩は、恥ずかしそうに頭を掻いていた。「だって、俺の誕生日、八月だし」と意味の判らないことも言っていた。「しかし、今日か。今日がクリスマスだったのか」

「せっかくのクリスマスに、先輩と二人で、職場にいるなんて」嘆く他ない。「しかもゾンビに囲まれてるとか、意味判らないし」

私達は、騒ぎが起こってからずっと、ラジオ局の放送室に立て籠もっている。防火用のシャッターで守られているが、破られるのは時間の問題だと思えた。

「俺なんて、一週間も家に帰ってないんだぜ。職場に泊まり込みだ。そりゃ、時間の感覚もなくなるわ」先輩も嘆く。「外は、クリスマスイルミネーションで、さぞかし綺麗だろうなあ」

「今、クリスマスしてる人なんて誰もいねーですよ。そんな奴がいたら、見てみたいですよ」

「前から思ってたんだけど」と、先輩が、真っ正面にこちらの顔を覗き込んでくる。不覚にもドキッとしてしまっ、端正な顔立ちだった。な、なんでしょう。私は、緊張を悟られないように、目を逸らす。

「イブってなんの為にあるんだ」

大真面目な顔をして、そう聞いてきた。「っていうか、イブってなに」

「さあ……？」私も、正確なことなど、知らない。

「俺達は、この謎を解き明かせないまま、死ぬのか」先輩は大袈裟に嘆いた。「畜生、なんだか、悔しくなってきた」

「ちょっと、死ぬとか言わないでくださいよ。私、あんまり考えないようにしてるんだから」

「むかつくから、放送してやる」

そう言った後の先輩の動きは、素早かった。ラジオ局勤続七年の先輩は、殆ど一人で全ての機器を操作して、着々と放送の準備を進める。私も、どうせやることないし、と手伝った。「つつーか、一度でいいから、DJってやってみたかったんだよね」と先輩は歯を見せる。

「もう、がんがん曲流しちゃいましょう」私はヤケクソだった。「折角ですし、クリスマスソング特集ですね」

「わっちゅ・あ・へっど」突然先輩が呪文を唱えたのは、驚いた。

「なんですか、その、不穏な呪文だ」

「『頭はどこだ！』っていう曲なんだけど、知ってる？」

「知りません」

「ゾンビが出てくる映画で、主人公達が頭を次々に撃ち抜くシーンで流れてたんだけど。あれなんて、どうかな」

「いや、クリスマスソングにしましょうよ」

「俺、クリスマス嫌いなんだよー」

「つつーか、用意されてるテープも、クリスマスソングばかりですし」

「クリスマスに、クリスマスソングを流すのは、安易だ。どうせ、どの無線でも、どのラジオ局でも、どのテレビ局でも、流すんだから。そういう時こそ、全然関係ないロックを流したら、視聴率がとれるんじゃないか、と俺は思うんだけど。どうかな」

「クリスマスはクリスマスソングで決まりです。当たり前じゃないですか」

「先人達は、当たり前前を打ち壊して、偉業を成し遂げてきたというのに」

私は、異論を認めるつもりはなかった。

「いいから、とにかく、ちゃっっちゃとやっちゃいましょう。せっか

「くだし、私にも何か喋らせてくださいよ」
「順番にやっていくか」

防火シャッターが、がっしやんがっしやんとやかましい。音声を拾わないように注意しながら、私達は生放送を続けた。どんどんテンションが上がってきて、二人でわーわーぎゃーぎゃー騒いでた。「これ、誰か聞いているのかなー！」大声で笑いながら、先輩が叫んだ。「誰か聞けよなー！」

ちょうど曲が終わって、私の出番になった。

「もしもーし！ 聞けますかー！ こちら、ナミバラジオです！ クリスマス、凄いことになりましたねー！」そこで、先輩が、「あ」と言った。

「ごめん、音声切れてた。もっかい」

「え、ちよつと、メチャメチャクールダウンなんですけど」

「もっかい、もっかい」

「もしもーし！」と叫んだ。

先輩が、どこからか、一枚のテープを持ち出してきた。「次はこれな、これ」と、嬉しそうだ。「この曲、いいよ」

「わっちゅ・あ・へつど。じゃないでしょうね」私は警戒する。「絶対、駄目ですからね」

「いや、残念ながら、わっちゅ・あ・へつどは用意出来なかった」残念そうに、肩を落としたが、直ぐにまた笑顔を向けてきた。「でも、これもいいよ」

「誰の曲ですか」

私が、そう尋ねると、今度はバックを持ち出して、その中から一枚のCDを出して、見せびらかしてきた。

ジャケットでは、サングラスを掛けた、やや肥満の男が、信じられないほどの鮮やかな笑顔を見せている。

「盲目のシンガー」先輩も、その肥満の黒人と似た笑顔を見せた。

「様々な苦難を乗り越えた、俺の尊敬すべき大先輩だ」
「大先輩って、なんの先輩なんですか、なんの」
「人生、とは言わない。細かいことはいいじゃないか」

曲が流れている間、今の今までワーワーと騒いでいた先輩は、静かだった。曲に聞き入っているようにも見えず、これからの、自分達の運命を案じているかのように見える。

「俺は」おもむろに喋りはじめた。「音楽に、人を救う力があるだとか、そういう話は信じてないんだ」

若干、意外だった。「そうなんですか」と尋ねる。

「音楽は、人に選択を強いるんだ」

先輩は、そう言った。「『選べ、許すのか、許さないのか』少なくとも、この曲はそう言ってる」

「許すとか、許さないとか、なんの話ですか」

「『選べ、許すのか、許さないのか。その時初めて、君の罪は許される。復讐を求めた、君の罪は』。嫌味なことに、許すべきなのか、許さざるべきなのか、その事には触れてないんだよな」

すう、と息を吸って、それから、いつものようにおどけた表情を見せた。「即興で訳したから、あってるかどうかは知らないけど」

曲が終わった。その後で、先輩が、マイクに向かう。

「ゾンビも、人も、動物も、聞こえますか」

と、この放送を聞いているかもしれない誰かに向かって、喋る。私は、「ゾンビとか言っちゃ駄目でしょー」と笑いながら、機材を弄る。いいじゃないか。と先輩がおどける。

「我々に残された時間は、余りに少ないです。選んでください」先輩は、それからもまだ続けた。「今、貴方の隣にいる人を、許すのか、許さないのか、選んでください。この声が聞こえるなら、どうか」

なぜか、先輩は泣いていた。それから突然、苦調が荒くなる。「どうせ、終わりなんだしよ。それでもまだ誰かを憎むなんて、止

めてくれよ。今この瞬間、世界中の戦争って、終わってるんだろ。なあ、そうだよな。敵も味方も、ねえだろ。チャンスじゃねえか。許せよ、許してやれよ」

叫んだ。

「勇気を出して、許してやれって！」

「先輩……」なんと声を掛けたらいいのか、判らない。「すみません」

「いや、おれこそ、悪い。取り乱した」

「いや、つつーか、本当に、すみません。今の、途中から、音声切れちゃってました」

「え」

「止めようかと思ったんだけど、ちょっと先輩、熱くなってたものだから」

「嘘、メチャメチャクールダウンなんだけど」

「もっかい、いきますか？」

「テンション高くなきゃ、あんなこと言えないって」

すっかり、元の先輩に戻っていた。それから、涙交じりに、噴き出す。「死ぬほど恥ずかしいんだけど」

「いや、でも、多分、聞こえましたよ」

「聞こえてないって。音声、切れてるじゃん」

「聞こえてましたって」

私は言い張った。

それから、今の声を聞いたかもしれない、誰かのことを思う。

ライブ（後書き）

お付き合い頂き、ありがとうございました。

「・オブ・ザ・デッド アイム・ライブ」
完結です。

ゾンビやらなんやらと、奇妙な話にはなりましたが、書いていて面白かったです。

評価、感想など、何かありましたら、どうぞよろしくお願いします。

それでは、またなんぞ、縁があったら、です。

注）黒人シンガーは、実在の人物ではありません。

注）「わっちゅ・あ・へっど」もおそらく、実在していません。

注）ピエロに模したファストフードのキャラクターは、まあ、なんでしょう。あれって、ちょっと怖いですよ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2586d/>

・オブ・ザ・デッド アイム・ライヴ

2009年3月24日09時48分発行